編集のことば

今号は「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」をテーマに特集を構成した。『ジェンダー研究』は、ジェンダー・フェミニズム理論に基づいた各分野の先駆的な研究を紹介する学際的な学術誌であるが、美術史を取り上げるのは大きな挑戦である。美術史をジェンダー・フェミニズム視点で研究した学問的な蓄積がまだ国内では不充分であるだけでなく、これまで『ジェンダー研究』は社会科学分野に相対的に重点をおいてきたからだ。

それでも敢えて今回の特集を企画したのは、ジェンダー・フェミニズム理論は、異なる分野の研究者が互いに問題意識を共有してコミュニケーションすることを可能にするという信念があるからだ。伝統的な学問分野でフェミニズムの視点に基づいた研究は、その重要性に比してまだ少なく、学際的な知見はいまなおとても重要である。特に性暴力を告発する＃MeTooが文化芸術界から爆発的に全世界に波及したにもかかわらず、文化芸術分野のジェンダー研究は十分とは言えない。今回の特集号では表現の現場としての美術界内のジェンダー構造を扱ってはいないが、女性画家の作品や、ジェンダー・セクシュアリティ表現に対する新たな分析を通じて美術界の主流派の常識を批判的に考察し、美術界の構造に対する理解が深まることを期待した。本特集をテーマにして開かれた公開シンポジウムに参加したある美術大学の学生は、学校の授業では聞けない貴重な発表だったという感想を残した。その一言が『ジェンダー研究』が美術史特集を企画した理由を代弁していると思う。

美術は情動を喚起することを通じて主題に対する共感を拡張し、想像力を刺激して、その力で人を動かす。情動を通して訴える力は作品の受け手において世界を新たに解釈する力となり、それゆえ美術は社会的で政治的である。日本軍慰安婦少女像をめぐる表現の自由に関する論争が続いているのもそのような理由だろう。本特集が美術界内のフェミニズム表現運動と研究の可能性に少しでも寄与し、美術と他の学問分野の活発な研究交流を促進する触媒になることを望む。

今号が美術史特集を企画できたのは、この分野の先駆的研究者である天野知香教授が本誌編集委員であるという大きな幸運による。1年前、天野教授にこのテーマでのシンポジウムの企画と本誌特集責任編集者をお願いしたところ、コロナパンデミックという難しい時期にもかかわらず快くその役割を引き受けて下さった。責任編集や執筆、シンポジウムでの発表まで担ってくださった天野知香教授と特集の執筆者たちに特別な感謝の意を表したい。

そして22号から呼吸を合わせて企画編集をしてきた平野恵子・仙波由加里特任講師が今号を最後に編集局を去る。お二人の尽力により『ジェンダー研究』は学術誌として盤石となった。心から感謝するとともに、新編集事務局体制のもと、より大きな飛躍を目指したい。

編集長　申琪榮